

モモとルリのおわりのないたび





ある日、カバのモモのもとに、かわいらしい小鳥がとんできました。

「おうちがわからないの。どうしよう」

小鳥ははねをバタバタさせ、なみだをポロポロこぼしていました。

「おうちがわからないなら、ここにいるといいよ」

「ほんとに？ わたしはルリっていうの。カバさんは？」

「ぼくはモモっていうんだ」

「よかった。じゃあ、わたし、モモちゃんとしばらくいっしょにいてもいい？」

ルリは、高い声でうたうようにいいました。

「うん」

モモはとってもよろこびました。

モモはいつもひとりでした。ほかのカバたちからはなかまはずれにされていたのです。

モモは、ルリとすぐになかよしになりました。そして、ルリのことがかだいすきになりました。



ルリは、モモの体をかいてあげたり、水あびをしてあげました。いつもモモのあたまにのって、モモのお話をききました。夜は、モモのあたまのうえでねむりました。

モモは、ひとりでないことにしあわせをかんじていました。それは、モモにとって一番たいせつなことでした。



ある晴れた日、モモはいいました。

「ぼくたちはとっても気があうね。ぼくは、ルリちゃんといるとたのしいんだ。友だちだよね。これからもずっといっしょにしようね」

ルリは、

「そうね」

といい、モモのあたまのうえをとびながら、きれいな声でうたをうたいました。



毎日、毎日、ルリはモモの話しあいてでした。モモは、こんな日がずっとつづけばいいとおもいました。

しかし、とつぜん、とおい空のどこかでこんな声がルリのみみにとどきました。

「こっちへおいでよ。もっともっとすてきなせかいがあるよ」

ルリは高い空をみあげました。けれども、声のぬしをさがすことはできませんでした。



モモがねむっているよなか、ルリはおもいきってきめました。

「すてきなせかいがあるなら、いってみよう」

ルリはドキドキしながら、たかくたかくとんで、大きくはばたきました。



つぎの日のあさ、モモはルリがないことに気づき、かなしくなってなみだをながしました。
「どこへいっちゃったんだ」
空をみても、森のほうをみても、ルリのすがたはありませんでした。



とびたったルリは、きぼうでいっぱいでした。ワクワクして、つばさで風をきって、大空をまっすぐとんでいました。

すると、したになにかがみえてきました。ルリは、どんどんと近づいていきました。それは、カバの親子でした。なにかいっているのがきこえてきます。

「モモちゃん、りっぱなカバになれるように、たくさんたべるのよ」

「うん、大きくなったら、みんなのリーダーになるよ」

「そうね、モモちゃんならきつとなれるわ」

カバの親子は、しあわせそうによりそってあるいていました。

「あ、あれはモモちゃんじゃない？」

ルリはそうつぶやきましたが、あまり気にしませんでした。



ルリは、カバの親子をおいこして、すてきなせかいをめざしてとんでいきました。そして、くものあいだから、少しだけしたをながめました。

すると、小さなカバが、いっぴきで川のそばでじっとしています。なかまたちは、川のなかにはいていました。

ルリはどうしたんだろうとおもい、みみをすませました。

「モモのおかあさんは、ワニにたべられちゃったんだ。あのモモをまもるためにだよ。ほんとうはモモがワニに食べられていたはずなのに。モモのおかあさんは、むれのなかで一番やさしくておだやかだったよ。ワニをおそうことすらしらなかったんだ」

ルリはびっくりしました。

「モモちゃん、そうだったんだ」

小さなカバは、いつまでもうごきませんでした。



よるになると、ルリは木のえだにとまり、空をみつめながらモモのことをおもいました。
「モモちゃんはずっとひとりだったんだね。かってにとんできてしまっでごめんね。でも、私もひとりだよ。もうすこししたらかえるからね」

ルリはそうちかいながら空をみあげると、ほしがたくさんふってきました。

「きれい」

ルリはつぶやきました。



モモはひとりで水あびをしていました。

「ぼくのまわりにはだれもない。おかあさんも、ぼくが小さかったときにしんじったんだ。ルリちゃんもどこかへ行ってしまったよ。ぼくはずっとひとりぼっちなんだ。でも、おかあさんのぶんまで生きなくっちゃ」

そう小さく、カブよくいいました。



朝をむかえたルリは、おちつかなくなりました。

「モモちゃんはわたしのたいせつなお友だち……。でも、どっちにいったらあえるの？」

ルリは右も左もわからなくなっていました。さびしくなって、心ぼそくなりました。

「モモちゃんはどこにいるの？ どこにいったらモモちゃんにあえる？」

ルリは、また空にむかってとびたちました。

「すてきなせかいなんてない。ひとりぼっちはきらい。でも、どっちにいったらいい？」

小さなむねにふあんをいっぱいにかかえて、ルリははばたきました。

とおくに山がみえました。

ルリはなにかをしんじて、力づよく、力づよく、山をめざしてとびたっていきました。

～おわり～